

---

# スパイダーマン

仁

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スパイダーマン

### 【NZコード】

N6587Y

### 【作者名】

仁

### 【あらすじ】

30世紀の世界で、突然変異により新たな人類が誕生した。

新人類は地球を自分たちが支配しようと、旧人類に宣戦布告した。これにより起こった旧人類と新人類の戦争の最中、

新人類が開発した小型の生物兵器『アカシック・スパイダー』が誤作動により、21世紀に放たれた。

旧人類と新人類の戦争は、新人類の数がまだ少なかつたことと、旧人類の技術力が高かつたこともあって

新人類が敗北した。

しかし、生き残った新人類は『アカシック・スパイダー』がたどつた21世紀までの道のりを発見する。

新人類はまだ旧人類が高い技術力を持つていなかつた21世紀に行つて旧人類を絶滅させようとして21世紀へ向かい、たどり着く。

そして物語は始まつた・・・

## 第1話「蜘蛛の糸」

深夜2時。

草木も眠る丑三つ時。

少年・北嶋 電は自分の部屋でパソコンをカタカタやっていた。

電

「…………」

受験生なので勉強をしなくてはならない時期なのに、やる気がしない。  
もはや自分の人生などどうでもよくなつたような感じだ。

反抗期なのでもちろん親の「」ことも聞かない。

電

「…………」

パソコンをやつていてるうちに、喉の渴きを覚え、  
パソコンの机から立ち上がり水を飲もうと台所へ向かう。

電

「…………」

台所の戸棚からコップを取りひとつ手を伸ばす。

電

「…………イテツ」

そしたら、腕をなにかに噛まれた。

よく見たら、噛みついたのはおかしな色をしたクモだった。

電  
「クモか・・・・・」

興味がないよつて反応し、痛みもすぐには消えたのではなくて、  
クモもどこかへいった。

電  
「・・・・・・・」

コップに水道水を入れ、飲み終わった後は別に用がなかつたのに  
部屋に戻つた。  
しかし、体に妙な異変を感じていた。

電  
「・・・・・・・？」

翌朝

電は氣分悪そくに起きてきた。  
どうやらパソコンをやりながら寝てしまつたよつだ。  
しかし、パソコンとはもはや日常生活なのだ。

母

「お、やつと起きたね。モーたパソコンやりながら寝ちゃつたんで  
しゃう。

全く・・・・

起きてきた電に向かつて、電の母親が呆れたよつて言つた。

電

「・・・・・」

母

「あんた受験生なんだからもつとしつかりしなさいよ。  
それがあんたちゃんと勉強してるの?」

電

「・・・・・」

返す言葉もなかつたのと、眠気がまだあつたので、言葉を返す気も  
なかつた。

そのとき、テレビでニュースが流れた。

『ニュースです。今日午前5時頃、東京都刈澤市上空で  
謎の生物が浮かんでいるところを目撃されました。  
その同じ時間に、同じ場所で不自然な爆破事故が発生しました。  
30人が死亡、12人が重体です。』

これらの目撃情報と事故との関連は分かつておりません。』

母

「あらー、怖いわねー。」

少し怖そうな表情をして不安げにニュースを見る母親。

電

「・・・・・」

その反面、電は興味ありげにコースを見ていた。

母

「ほら。なにのんきにコース見てんの。早く学校行きなさい。遅刻するでしょ。」

電

「チヨツ」

母に注意され、仕方なしにしぶしぶ学校の仕度をし、家を出た。

電

「あー、ダリー。学校行きたくねー・・・」

そつ愚痴を言いながら歩いていると、また体に妙な異変を感じた。

電  
「また・・・なんだこの感じは・・・」

電

学校

電は友達の田中研・芝田空と今朝のコースについて話していた。

研

「おい、お前ら、今朝のコース見たか。」

電

「ああ。あれってなんなんだろうな。宇宙人?」

研

「だったら面白くなー。」

昔の男子がひしゃく、好奇心に満ちたような感じで語り合へ。  
だが・・・・

空

「別に俺には興味ないね。」

空はこれについて関心がないようだ。

彼もまた、電のように受験勉強もせず、自分の将来を捨てたかのような少年だ。

電

「だつてす」「いやねえか。それに、爆破事故だつて起きたそじやねえか。

絶対あの生き物がやつたんだよ。」

もともとヒューリジカルの話題が好きなので、空に熱く語る電。

空

「ンー、まあ人類が滅亡するんなら面白いんだけどな。」

研

「オイ・・・・・でもたぶん偶然なんじゃねえの?」

どうもできすぎた話だといつぱり研は言つ。

電

「いや、だつてあれ不自然な事故だつたらしいじゃねえか。」

空

「まあどうにしろ、その生き物が人類滅亡でもしてくれりや、久々に面白い大騒動が起きそうでいいんだけどな。」

電&研

「オイ・・・・・」

空の言動に引きながらもソッコむ電と研。

空はもう世の中がつまらなく感じているようで、2012年の人類滅亡を信じてる程だ。

すると、そこへ教室に先生が入ってきた。

先生

「ハイ、一時間目の授業すっぞー。早く席につけつけ。」

電&研&空

「チヨツ・・・・・」

席につく三人。

そのとき、電は体にまた妙な異変を感じていた。

電

「なんなんだ」の感覚は・・・・・

先生

「・・・・・電、なにひとり」と言つてんだー?」

電

「い、いえ、なんでもないです・・・・・」

自分のひとりごとが聞かれて恥ずかしそうに返答する。  
他のヤツらに聞こえなかつたらいいなと静かに周りをキョロキョロする。

放課後

研

「おこ電。一緒に帰るわぜー。」

電

「オウ。」

下校中、また今朝のニュースの話題をする電たが。  
すると、空に謎の怪物が浮かんでいた。

電

「・・・・・ツー！」

研

「オイ、なんだアレ・・・・ー？」

その怪物はトビウオのような姿をしていた。

怪物

「キシャアアアアアア」

電

「ワツー？」

研 「ちゅう・・・・！」

そのトビウオの怪物は電たちに向かって襲いかかるよつて急落下していく。

とっさにかわす電と研。

しかし、怪物は電たちを殺そつと電たちに襲いかかっていく。

電

「わあっ、何だコイツ・・・・！」

研

「た、助けてくれー！」

怪物

「キシャアアアアアア」

町の住人

「なんだなんだ・・・・・・わっ、なんだありや！？」

騒ぎを聞いて出てきた街の住人が、トビウオの怪物を見て驚く。

電

「くそおっ、どうしたらいいんだ・・・・・・

研

「オイ、俺警察に通報してくるがりー！」

研はそつと公衆電話のある方向へ走りだす。

電

「頼んだぞ、早くしろよー。」

怪物

「キシャアアアアアア！」

電に向かってしつこく襲いかかってくる怪物。

その姿は今朝のニュースに映ったあの生き物だったのだ。  
やがて、研が通報して、パトカーがやってきた。

警官A

「ありやなんだ・・・怪物じゃないか・・・」

警官B

「おい、今朝のニュースでやつてた怪物じゃないかアレー！」

驚きながら、警官たちがビウオの怪物に発砲する。  
弾はずビウオの怪物に直撃する。

怪物

「グギイツ！」

しかし、怪物には効果がなく、むしろ怒りを買ってしまったようだ。

怪物

「キシャアアアアアア！」

警官A

「ウワッ、ウワアアアああー!？」

電

「クソおつ・・・・んつ！？」

すると、電の体にまた異変が起こった。  
しかし、今回は異変が前のより大きかった。

電

「ウツ・・・・・ウウ・・・・・」

電の体の色が赤く変化していった。

電

「一体・・・・何が・・・・・」

やがて下半身も青く変化していく。

そして皮膚の毛がなくなり、体表に黒いタイル状の線が走った。

電

「ウウウウ・・・・・」

電の体は赤と青の怪人に変化していた。

電

「コレは・・・・・一体・・・・・・

怪物  
「グギッ！」

怪物は怪人に変身した電に気付き、再び電に襲いかかる。

電

「ウワアッ、また・・・・・」

そういうながら走つて逃げる。すると、何故かいつもより速く走っていた。

車が走る速さと同じくらいだった。

電

「なつ、なんだこの速さは・・・・・!？」

しかし、怪物はそれよつと速く飛び、すぐに電に追いついた。

電

「ゲツ、クソお・・・・・・」

電はやけくそになつて怪物に向かつて思いつきりパンチを放つ。すると、パンチをくらつた怪物は思いつきり吹つ飛んだ。

怪物

「グギヤツー?」

電

「えつ!?」

吹つ飛んで転がる怪物を見て驚く。  
まさか自分のパンチで怪物をあそこまで吹つ飛ばせたのかと、信じられなくなつて叫びついた。

怪物  
「グギギツー!」

しかし怪物はすぐ起き上がり、再び電の方へ飛行する。

電

「クッ、じつは……よし、もう一発！」

自信がついて、怪物にもう一発パンチを食らわせよう。

怪物

「ギギッ！」

電

「なつ、ワタツ！？」

しかし、同じ手は一度とくらわないのか、パンチした腕は怪物の手にキャッチされ、そのまま思いっきり投げ飛ばされた。

電

「ウワアッ、クウ……！」

投げ飛ばされて地面に転がる電。

怪物はまだしつこく電の方へ向って飛行する。

電

「うわあっ！」

もつ逃げるしかないと思い、走り出す。

しかし、やはりすぐに追いつかれてしまった。

電

「クツ、じうなつたら……」

今度は逆方向に向かつて走りだした。  
怪物はあっけにとられて、電の向かつた方向へすぐに方向転換できなかつた。

怪物

「グギギギイ・・・・カアツ！…」

すると、奥の手として怪物の口から水色の火球が電に向かつて放たれた。

電

「ウソー、そんなのアリー！？」

驚いて腕を上げる。

すると、指先から白い糸が出て、その糸が電柱の先端に巻き付いた。

電

「んつー？これは…！？」

指先から出た白い糸に驚くが、怪物の放った火球を見てとつやにジャンプしてかわす。

やはり通常より高いジャンプだった。

電

「これは…・・・・よーし・・・・！」

すると、電の意思に反応したかのよう、糸は電柱からはずれ、

電はキックの体勢をとつて怪物に向かって急降下する。

電  
「といやああああ！」

怪物  
「ギバハアッ！」

キックが炸裂し、怪物はそのまま吹っ飛び、川に落ちた。

電  
「ハアッ！ハア・・・・・」

そのまま着地する。

警官A

「なんだりや・・・・・」

警官B

「また怪物が・・・・・」

電  
「やべー！」

あまり見られるとまずいので、そのまま走り去る。

相変わらず、車が走る速さと同じだったので余計目立った。

電  
「この力、一体何なんだ・・・・・」

電は走りながら考える。

続く

## 第1話「蜘蛛の糸」（後書き）

初投稿です。下手ですが、頑張って書きました。  
是非読んでみてください。  
感想も願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6587y/>

---

スパイダーマン

2011年11月21日07時21分発行